

気ままに
文学散歩



相馬黒光「穂高高原」

物語の舞台 松本・上田市境の保福寺峠、安曇野市穂高



写真1=保福寺峠は標高1345m。晴れていれば槍の穂先や穂高の岩塊も見える。冬季閉鎖明け翌日の15日に青木村側から車で行って撮った。黒光も「穂高高原」でその頂上の展望に至ってはほとんど言葉をもって触れることをゆるされない」と書く

写真2=万水川の白金(しろかね)橋辺り。私は安らかに穂高の里から解き放たれ、止川、万水川、あぶなげに揺れる土橋を渡る折にさえも『行けよ行けよ、とどまるなかれ』『希望に燃えよ、力を伸ばせよ』と軽やかな水の饒(はなむ)けを心躍らしきくのであった

写真3=峠から青木村側へ少し下った所に「峰の茶屋跡」の標柱があった。本稿を書くに当たって参考にした宇佐美承さんの『新宿中村屋 相馬黒光』(集英社)には、良と愛蔵が峰の茶屋で昼食を取ったときの様子が記されている



何の装いもなく里からの付添いもなく、花嫁というには寂しすぎて、ただただ夫に伴われ、馬に乗って峠を越えて行つたのである。東都に学んだ青年の愛蔵もそこでは全く山国の人で、私の馬に気を配りながら一歩一歩、まるで山肌へ極印を捺すようにして上って行つた。

『相馬愛蔵・黒光著作集1 穂高高原』(郷土出版社)より抜粋

碌山芸術を生んだ峠越え

相馬黒光(本名・良、1876-1955)は仙台生まれ。白金村(現・安曇野市穂高)出身の夫・愛蔵とともに現在の新宿中村屋を起した。夫と同郷の彫刻家・萩原碌山を支援し、中村屋は芸術家や文化人が集まるサロンの様相を呈した。穂高での4年間の暮らしを描いた『穂高高原』は昭和19年に出版され、『黙移』(昭和11年初版)と『広瀬川の畔』(昭和14年)とともに自伝3部作と呼ばれる。

古代の官道・東山道が通っていたという。明治30(1897)年3月下旬、上野から汽車に乗った新婚の相馬愛蔵、良(黒光)夫妻は高崎で乗り換えて上田で降り、保福寺峠を越えて松本城下の先の安曇野・穂高を目指した。穂高は愛蔵のふるさどだ。愛蔵27歳、良22歳。2人は4年後、東京・本郷の帝大前にあったパン店の中村屋を譲り受ける。この峠越えの場面から『穂高高原』は始まる。

当時まだ現在の中央本線や篠ノ井線は開通していない。松本平と東京方面を結ぶ鉄路は信越線しかなかった。日本アルプスを世界に紹介した英国人のウォルター・ウエストンも、穂高から青雲の志を抱いて上京した彫刻家の萩原守衛(碌山)も歩いて(ウエストンは人力車で)この峠を越えた。

中にこんもりとおぼろに、それが村の見おきめであった

日本の近代彫刻にもたらされた碌山の「女」「抗夫」などの至宝は、相馬夫妻の保福寺峠越えなくして生まれなかった。絵を描くのが好きだった17歳の守衛は、良が持ってきた長尾奎太郎の油絵「亀戸風景」を見て、画家を志す。先輩の愛蔵が語る東京の話は外の世界への憧れをかき立てただろう。義重さんは「もしもあの絵がなかったら、芸術家・碌山は生まれなかった」と言葉を継いだ。

『穂高高原』で、初めて守衛に会ったときの描写が印象深い。

〈矢原の田圃みちに山を見て立っている一人の少年があった。木綿縞の袴纏に雪袴を穿いて、それでひとしおにずんぐりと小肥りに見え、まるい顔が邪気なく初々しかった〉

「信越線がなかったら碌山は簡単に東京へ出られず、黒光も嫁いで来られなかったのではないか。」碌山の長兄・十重十の孫に当たる萩原義重さん(75)は安曇野市穂高が鉄道史と絡めて話す。

良は明治34年に穂高を離れた。愛蔵とともに西条駅から東京へと向かっている。前年に篠ノ井線の長野―西条が開通していた。万水川を渡って西条までの道のりは保福寺峠越えの12里(約48き)を思えば(半道)だった。

「万水の東の岸に越えて立てば、我が家の土蔵の白壁は求むれど見えず、鎮守の森だけが朝靄の間にこんもりとおぼろに、それが村の見おきめであった」

日本の近代彫刻にもたらされた碌山の「女」「抗夫」などの至宝は、相馬夫妻の保福寺峠越えなくして生まれなかった。絵を描くのが好きだった17歳の守衛は、良が持ってきた長尾奎太郎の油絵「亀戸風景」を見て、画家を志す。先輩の愛蔵が語る東京の話は外の世界への憧れをかき立てただろう。義重さんは「もしもあの絵がなかったら、芸術家・碌山は生まれなかった」と言葉を継いだ。

『穂高高原』で、初めて守衛に会ったときの描写が印象深い。

〈矢原の田圃みちに山を見て立っている一人の少年があった。木綿縞の袴纏に雪袴を穿いて、それでひとしおにずんぐりと小肥りに見え、まるい顔が邪気なく初々しかった〉

県道の冬季通行止めが4月14日に解除された。ところが県による、松本市保福寺町・保福寺峠に災害復旧の工事箇所があり、当面この区間は車が通れない。

冬季閉鎖の解除を待ち切れず、峠の向こう側の小泉郡青木村のゲートに車を置き、くねくねとカーブが続くアスファルト道を1時間半ほど歩いて歩いた。図らずも愛蔵、良と同じ方向から峠を目指したわけだ。アルプスの連なりはいにく雲に隠れ、誰もいない峠に野鳥のさえずりがピーピーと響いていた。(山本政吾)